

【研究ノート】

1950-70 年代の新聞歌壇に見る〈道具〉百景

一掌へのオマージュ

A catalogue of "Tools" reflected in the readers' Tanka poetry columns
of different newspapers from the 1950s to the 1970s:

Homage to the human's palm

大洞敦史

DAIDO, Atsushi

キーワード：道具；生活；短歌；新聞；高度経済成長期

Received: 2009. 9. 20

1. なぜ新聞歌壇か

1.1. 研究目的

本稿は、新聞歌壇をフィールドとした一研究の覚え書きである。新聞歌壇とは、読者から投稿されてきた短歌を選抜して掲載する新聞紙上の一コーナーを指し、「一八七〇年代後半に創刊した「読売新聞」をはじめとする小新聞は、その投書欄に詩歌が頻出するという形で詩歌と新聞の結びつきが見られる」¹⁾と土屋礼子が述べている通り、新聞黎明期以来の伝統をもつ。

本稿の研究目的は、1950 年の初頭から 79 年末までのおよそ 30 年間に、「朝日新聞」「中日新聞」「読売新聞」ほか、種々の地方新聞の投書欄に掲載された、市井の人々の手になる短歌作品を対象に、そこで詠み上げられてきた生活道具のリスト化、および作成したリストに対する多様な視角からの比較分析を行うものである（例えば投稿年、季節、投稿者の居住地等といった与件データに基づく考察に加えて、作品中の歌詞を時代相の反映物＝^{うたことば}シニエと捉えた上での記号学的な解釈も試みてみたい）。

これら一連の分析を通じて、〈道具〉という、日常生活の場を構成する諸々の事物・風物の内でもとりわけて人間に身近い存在の一種であるものが、高度経済成長期と呼ばれる急激な社会変動の時代、およびその前後の時期において、どのような変遷の過程をたどってきたのかを考察する事——別言すれば、当時の日本人の^{てのひら}掌がどのようなものを握んだり、撫でたり叩いたりつまんだりしながらその機能するところを自然界の諸事物に対してはたらかせ、日々の暮らしを紡ぎ、ひいては次の時代を切り拓いてきたのかについて検討を加える事——が主な課題となる。

1.2. 〈道具〉の定義

本稿では〈道具〉の語を次の 2 種類に定義する。一つは「物を作ったり仕事をはかどらせたりするために用いる種々の用具。また、日常使う身の回りの品々」とするもので、『日本国語大辞典』（小学館、2006 年精選版）に拠る。もう一つは「人間の身体に備わる機能を部分的に増幅させる物品」とするもので、「いかなる発明あるいは技術も、われわれの身体を拡張ないし自己切断したものである」²⁾と定立した M.マクルーハンの論脈を踏まえての筆者による定義である。

1.3. 新聞歌壇の豊穡性

1950 年代から 70 年代にかけての〈道具〉と人間との関わりを考察するにあたり、統計学という標本調査の対象として新聞歌壇を選択した理由は、第 1 にヴァリエーションの豊富さである。歌壇にはさまざまな地域に住まう、さまざまな立場の人々の生活経験が「ごったがえ」しており、日記や自伝や小説などのような書き手個人の寿命と生活体験と想像力とに時代相の反映度を大きく依存する媒体と比べて、勝るとも劣らぬ史料的価値を有するものと考えられる。

理由の第 2 は分量の豊富さである。例を挙げれば、1955 年に「朝日新聞」に掲載された短歌の総数は 567 首、1979 年の「中日新聞」では 1,020 首に上る。

第 3 に、新聞紙上の投稿詩歌には短歌の他に俳句や川柳などが見られるが、「毎日新聞」歌壇欄選者の伊藤一彦が短歌について「近代になると、日常のことばを積極的に生かし、そこに豊かな作品が生まれるようになった」³⁾と述べているように、近現代の短歌には新しく登場してくることば（用法のみならず名詞についても）をその都度さほどの抵抗もなく取り込んでいくという特徴を有し、それゆえに時代毎の生活状況が如実に反映されているものと推測される点が挙げられる。

第 4 の理由として、例えば新聞の報道記事と短歌とが「出来事を記述する一形式」であるという性質において一致するとしても、短歌にあっては記述内容と事実との間に厳密な整合関係を持たせる義務をあらかじめ免れている、という点がある。俵万智の『「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日』という有名な 1 首について作者は後に、「君」に褒めてもらったのはサラダではなくて「カレー味の鳥のからあげ」であり、「6 月 7 日」の出来事だったと打ち明けている⁴⁾。しかしフィクションであることが明らかになったからといってこの歌の文学性が損なわれる訳ではなく、俵の社会的信用に疵が付くような事にもならない。

1.4. 心象風景の歴史

この例に限らず、歌の中で描写される出来事ないし情景について、過去において詠者がそれを実際に体験したかどうかを余人が検証することは極めて困難である。だが少なくとも、詠者がそうした出来事・情景を「心象風景」において「想起」し、かつ「言語化」した事に関しては、それが盗作でない限り、歴史的な事実として認め得るはずだ。したがって短歌は「個人の心象風景の記録メディア」という側面を有し、その集合は「古人の心象

風景のアーカイブ」と見なしえよう。本稿は以上のような認識・視点に基づいて、市井の人々が詠んできた短歌に否応なく焼き付けられている歴史の刻印を読み取ろうとするものである。

1.5. 投書欄が報道するもの

ここで、新聞投書欄が一般に有する特徴について若干の考察を加えておきたい。「投書」という語が新聞紙上で初めて用いられたのは1872年4月27日、「東京日日新聞」での事とされている⁵⁾。爾来投書欄は新聞という活字の一大群島において中堅的な位置を保ってきた。投書欄はその性格上、2種類に大別できる。政治や社会問題について積極的に意見を投げかけるものと、時事的な出来事にはあまり言及しようとせず「鎖国性」を保つものである。

朝日新聞を例に取れば、「声」欄は前者に、「ひととき」欄は後者に該当する。人類が史上初めて月に降り立ったニュースに日本中が沸きかえった翌日の朝刊にあっても、「ひととき」欄では知力にハンディキャップをかかえた息子を施設に入所させる選択をした母親が、近所の人たちの開いてくれたお別れ会で、別れの意味も汲み取れず歌ったり踊ったりはしゃいでいた我が子の姿を描写し、同じ紙面の「身上相談」欄では生きる理由を見失った女子浪人に映画監督の羽仁進がフランクルを引き合いに出しつつ励ましている⁶⁾。投書欄のもつこうした「鎖国性」は、現実に対して無関心を決め込んでいることを意味しない。

そうではなく、政治や経済や国際情勢においての現実とはレベルを異にする別の現実、すなわち個々の人間の日常生活とそれにまつわる諸々の感情や想念という人間心身の本源的な居場所（身の上）において絶えず生成変化しつつある出来事を、投書欄は日々「報道」し続けているのである。

2. 方法と実例

2.1. 研究の流れ

本研究は次の5つの階梯を踏む。

- (1) 1950年1月1日から79年12月31日までの間に発行された新聞各紙を図書館にて閲覧し、併せて歌壇欄のコピーを取る。
- (2) (1)において取得した総ての短歌作品について、本研究で定義するところの〈道具〉に該当する語句をチェックする。
- (3) データベースアプリケーションソフト「FileMakerPro10」を用いて、〈道具〉およびそれに準じる語句が登場する短歌作品を、当該の作品が掲載された新聞名と日付と選者名および投稿者に関する諸情報と共にリスト化する。
- (4) 作成したリストに対して^た矯めつ^{すが}眇めつ分析を施す。投稿年、季節、掲載新聞、投稿者の居住地、性別などの与件データに基づく考察、〈道具〉の登場頻度の調査や用途に照らした系統図の作成等に加え、作品自体への読解も試みる。
- (5) 以上の分析の結果浮かび上がってくる、当時の人々の生活相に関する知見を記述し、論文にまとめる。

2.2. 資料（新聞）選択上の留意点

標本調査に際しての基本的な心構えとして、収集するデータの上に母集団（ここでは 1950～70 年代における日本の〈道具〉群）の実相ができるだけ忠実に反映されるよう心を砕かねばならない。今回の場合で言えば、投稿者の社会的ステータス（年齢・性別・居住地・社会的立場等）をなるべくまんべんなくカバーするように務める必要があろう。このうち新聞紙上に情報が記載されているものは通例、性別と居住都道府県のみである。

短歌という研究対象の特質上、年齢層において一定の偏りが予想される事は否めない。が、性別については概ね均等と今の時点では見受けられる。居住地や社会的立場に関しては、都市部居住者からの投稿数と農・山・漁村地域居住者からのそれとが均衡するように、地方新聞からのサンプリングを増減するなどして調整を図る必要があろう。素朴な連想として都市部居住者からの投稿比率が高いように考えてしまいがちであるが、少なくとも 1955 年の時点で朝日新聞に寄せられていた投稿歌に限って言えば、当時の選者の 1 人である宮柊二が「一般に投稿歌には、農村、病氣療養の人たちが最も多い。工場労働者の歌が少ないのはなぜだろう」⁷⁾と述べている事から、農村地域からの投稿数が都市部のそれを上回っていたと予想される。だが朝日以外の新聞やこれ以前・以降の年代における投稿者の居住地域の比率を把握する為には更なる調査を要しよう。

2.3. 定義の難しさ

どの語句を〈道具〉に含めてどの語句を除外するかという問題は、最後まで判断に迷いを残すものとなろう。上述の「物を作ったり仕事をはかどらせたりするために用いる種々の用具。また、日常使う身の回りの品々」という定義ではまだ抽象度が高すぎるかも知れない。風呂桶を〈道具〉と見なすとして、では湯船はどうか。「湯を使う」という表現があるが、高温の液体は〈道具〉と呼びうるか。「使う」という動詞に含まれる語義の広さは尋常一様でなく、多分に曖昧さを残したこの定義に一層の明晰さをもたすためには、「可動性を有する」とか「固形体の」といった語句を付け足す必要があろうが、それによってそれまで〈道具〉に含まれていたものが除外されてしまうケースも出てこようから、定義の仕方についてはなお慎重な検討が求められる。

2.4. 今回の調査にあたり設定したルール

この研究では膨大な分量の資料を調査することになるが、その最初の一步として、1955 年の「朝日新聞」（東京版）における「朝日歌壇」欄（全国共通）を対象に、作品中に現れる〈道具〉名の採取と分類を行った。その結果を次項に示し、本項では今回の調査にあたり設定した数点のルールを記す。

- (1) 〈道具〉に含めたものの群：家の部位のうち操作性の高いもの、書籍、乗り物、薬品等。
- (2) 〈道具〉から除外したものの群：金銭を示す表現（小遣、〇〇費等）、建築物を含む不動産、食品（「弁当」などの例外もある）、身体器官、動植物の生体、兵器等。
- (3) 判断に迷った語句は、「〈道具〉に含めるか検討中の語句」としてまとめた。

- (4) 1首の内に同一の語句が複数出てくる場合は1個として計上した。
- (5) 本来〈道具〉でないものが例外的な使用のされ方をしている場合、その一例に限り〈道具〉と見なした。
(例：「田のあぜへ横にたおれしまま眠る吾子へ稲束枕しやりぬ」⁸⁾の稲束)
- (6) 書籍名を表す明喩は書物に含めた。
(例：「磯の匂いしめり壁はげし狭き部屋ショーロホフをプルーストを君に識りゆく」⁹⁾)
- (7) 「化粧」の語については、「化粧なき清潔な娘でありしと吾のことを今宵夫の唐突にいい出づ」(8月7日付)という名詞的な用法と、「子の逝きて共に悲しき夫なればわれは化粧(よそ)いて優しからんとす」(9月4日付)という動詞的な用法とが見られ、前者のみをリストに含めた。

2.5. 調査例：1955年「朝日歌壇」欄に現れる〈道具〉の種類別一覧表

1955年の「朝日歌壇」欄に掲載された短歌作品の総数は567首であり、そこに現れる〈道具〉は205種類、重複を含めた登場回数は248回であった。その内訳を以下に記す。

医療・化学関係(7種、7回)：

最終のギブス / 手術着 / かの人の処方になれる睡眠薬 / 氷嚢 / 分析の終りシフラスコ / レントゲン / 実験の漏斗。

衣類・装飾品(27種、31回)：

衾^{あわせ} / オーバー / 新しき禪^{おび} / かすり / 亡児の着物 / 靴 / 下駄 / 作業衣×2(「草の渋つきし作業衣」) / 下着 / 支那服 / スカート / とき色のセーター / 僧衣 / 足袋×2(「白足袋」) / 白き朝鮮服 / チリ紙 / 内職の赤き手袋 / ハンカチ / 病衣 / 服×2(「赤い服」「夫の服」) / 古着 / ブルマース / シベリヤよりわが持ちてきし防寒帽 / 重き防水具 / ボロ×2(「ぼろ」) / 防塵マスク / 体臭にすでに稚き甘さ無し子のワイシャツ。

家具・操作性の高い家の部位(11種、14回)：

ガラスの雨戸 / 蚊帳×2 / 蛇口 / 洗濯器 / 入口の舗道の道の見ゆる卓 / 君の机 / ばらの鉢 / 布団×2(「妻の香の残る布団」) / ふろ桶 / 枕×2 / 毛布。

楽器・嗜好品・遊具(9種、10回)：

インチキ玩具 / オルガン / オルゴール / 紅つきし吸い殻 / 唸り風 / 煙草×2 / なわ飛び / 笛 / ぶらんこ。

裁縫・仕立道具(5種、5回)：

孔板 / 編棒 / 縫糸 / 機^{はた} / 針。

仕事用具(24種、27回)：

鋳型 / 稲車×2(「稲積む車」) / 稲馬車 / 稲舟 / 蚕道具 / 生前に使い居りたる金槌 / 物吊りて音なく動く起重機 / 杭×3(「国道の測量杭」「農地接収の杭」) / 釘 / 鋤 / 肥桶 / 鋤^{こて} / シャベル / 堆肥 / 鉋 / 田草取る農薬 / 糊 / 採乳のバケツ / 発破 / B・H・C¹⁰⁾ / 肥料 / 捕獲器 / リヤカー / 焼くる煉瓦。

台所用品・飲食関係(13種、18回)：

採血を終え配られし栄養食 / エプロン / 罐^{かん}×2 / コップ×2 (「長きコップ」) / 皿×2 (「焼跡に残りし皿」) / 食器類 / 膳 / たらい / 鍋 / 箸×2 / 壺 / 弁当×2 (「子の弁当」) / やかん。

通信機器 (3 種、4 回) :

受話器×2 / 隣室のラジオ / レシーバー。

電化製品 (4 種、4 回) :

ゆめと思う電気洗濯機 / 電灯 / マイク / 巡視婦のライト。

乗り物 (16 種、29 回) :

オートバイ / 汽車×2 / 牛車×2 (祖先らの牛車) / 自衛隊車 / 自転車×2 (「大き輪の自転車のペダル」) / ジェット機×2 / 櫓^{そり}×3 (「汽車と競ひ走る馬櫓」「暮れはてし雪つむ原に行き交いし馬櫓」) / タクシー×2 (「客を待つタクシー」) / 担送車 / 電車×2 / 都電 / トラック×2 / バス×5 (「愛し吾子^{あご}の命うばいしバス」「バスの機関部」「夕陽映ゆるバス」) / 飛行機 / 夜行列車 / 加藤さんを霊室に運びし輸送車。

火まわり (11 種、14 回) :

囲炉裡^{かやりび} / 蚊遣火 / 炬燵 / シャンデリヤ / 燭 / 炭×2 / 薪木 / 火鉢×2 / 窯^{かま}×2 (葉煙草の窯) / ランプ / 炉。

身支度品 (3 種、4 回) :

鏡×2 / 櫛 / 化粧。

文字媒体・絵・筆記用具 (32 種、38 回) :

己が愛書 / ローゼンバーク夫妻の遺書 / 伊勢物語 / うつしえ / 母亡くしたる吾子の絵 / 鉛筆 / 家計簿 / 賀状 / 原稿 / 辞書×2 (「英語の辞書」「ようやくに求めし辞書」) / 死ぬための理念求めて苦しみし戦没学生の手記 / 受験雑誌 / 昭和史 / ショーロホフ / 買ひためし書物 / 数学書 / 聖書×2 (「わが心辛くも支えるバイブル」) / 信濃の湖水の地図 / わが手帳 / 天気図 / 日記×2 (「終戦の日記」「星一つの軍服姿はさみたる日記」) / ぬりえ / ノート×2 (「古いノート」) / 葉書×2 (「賢明なる者は黙すべし」という葉書「僅かな葉書」) / プルースト / ペン / 本×2 (「形見の本」) / マルクス書 / 悪意なき漫画 / メモ / 「ニコヨン」の労務手帖 / 「若きアンネ」の日記。

未分類 (28 種、31 回) :

風揺ぐ団扇 / 街灯 / 警備哨舎の鍵 / 病室の窓に吊せるひわの籠 / 硫安^{りゅうあん}のかます / カメラ / 空槽 / くじ / 学長決らぬ揭示 / 小さき骨壺 / 小包 / ゴム / 笏^{しやく} / 黒板×3 (「休講の黒板」「暗き日の黒板」) / 女生徒の写真一葉 / 貯壺 / 縄 / 電はじく荷鞍 / 一つの箱 / バッグ / 花火 / 祖母のひつぎ / 紐 / 風車 / 袋×2 (「桃の葉を入れししろき袋」) / 空樽の蓋 / 幼児は姿勢保つ踏台 / 電化工場の溶解炉。

例外的に〈道具〉に含めた語句 (5 種、5 回) :

稲束 (「田のあぜへ横にたおれしま眠る吾子へ稲束枕しやりぬ」10 月 30 日付) / 焚火 (「焚火にて手あたむればつくづくと職奪い来し今朝を反省す」4 月 17 日付) / 土蜂を焼く火 (「蕎麦の花夜目にも白き山畑に土蜂を焼く火をもち出ずる」10 月 2 日付) / 名曲 (「ひさびさに名曲によしゅんかんに女中であるを忘れ驚き」11 月 13 日付) / な

ぎさの流木（「救援の乳暖むる燃料になぎさの流木生徒等と拾う」6月12日付）。

〈道具〉に含めるか検討中の語句（7種、7回）：

井戸 / 曳光弾 / 警笛 / 古き木羽^{こば} / サイレン / 湯槽 / 湯ぶね。

2.6. 上記調査結果への分析の切り口

この調査を通じて注意を引いた、1955 年の「朝日歌壇」欄に現れる〈道具〉の特徴を以下に箇条書きで記す。

- (1) 「火まわり」の品々のほとんどが今や大半の家庭から姿を消してしまっているのに対して、「乗り物」は牛車を除いて今なお使われている。現在でも広く用いられているものと姿を消してしまったもの、という分類の仕方も考えられる。
- (2) 語の重複は総じて少なく、登場回数の最も多い例は「バス」の5回であった。
- (3) 書物関係の充実ぶりが目を引く。文学作品では国産のものが「伊勢物語」だけで、あとは「ショーロホフ」「聖書」「プルースト」「マルクス書」『「若きアンネ」の日記』などヨーロッパ由来の作品である点が興味深い。
- (4) 〈道具〉判断に迷う語が7例と少なく収まったのは、仮の分類基準を設定した事による。
- (5) 「例外的に〈道具〉に含めた語句」は現在のところ5例だが、丹念に読み返せばもっと増えるに違いない。もの不足の時代にあつては手持ちの素材の潜在的な使用可能性を最大限に引き出す努力が常に求められていただろうし、そうして考案された種々のアイディアからは、人間の知恵の生鮮な息づかいというべきものをふんだんに伺うことができる。

3. 本研究の持ちうる意義

3.1. 〈道具〉は人間と自然との中間的存在

〈道具〉という先人の創意工夫の産物は、自然界の素材によって構成されていると同時に、人間の身体機能の一部を補填あるいは拡張するという性格を備えている。このことから〈道具〉とは人間と自然界との間^{あわい}に在って、人間の意思を自然界へ反映させる装置であると言いつてもできる。人間が自己の身体の外部的に何らかの影響を及ぼす事は、身体によってでなければ、唯一〈道具〉を用いる場合にのみ可能である。したがって自然界と人間との係わり合いについての認識を深めようとする者は、〈道具〉と人間のあいだのそれについても深く洞察を致さねばならない。

3.2. ヴィーコの信条

18 世紀イタリアの哲学者ジャンバッティスタ・ヴィーコは、「人々がいかに生きたかを理解したいと思うのなら、彼らがいかに礼拝したか、彼らの文字の書き方がどんなものであったかを知らねばならぬ。彼らがどのような偶像、暗喩、明喩を用いたか、どのようにして食べ飲み、子供を作り、自らを認識し、個人的、社会的、経済的、政治的生活に携わ

ったかを知らねばならない」¹¹⁾といった見解を、歴史を研究する上での根本信条としていた。

もしも過去の時代あるいは異文化圏に属する人々の心に寄り添い、内面の声に耳を傾けたいと願うのなら、相手方の起きてから寝るまでの行動全体に眼を向ける事が必須であろう。そして、人々がどのような〈道具〉を用いてきたかについて知ることが、どのような暮らしを営んできたかを知るための重要な手懸かりとなる。

高度成長期を挟む 30 年間という〈道具〉と人間との関係構造に巨大な地殻変動が生じた時期に日本人の心象風景を去来した〈道具〉の盛衰の過程をたどっていくこのささやかな研究が、何らかの意義を持ちうるとすればこの部分においてであろう。

3.3. 掌へのオマージュ

〈道具〉は歴史を動かす。その〈道具〉を作り出し、良きにつけ悪きにつけ活用しながら自然界と渡り合っていくものは、人間の^{てのひら}掌である。本研究は戦後の焼け野原の上で、豆だらけの皮に汗を滲ませて^{くわ}鍬を振るい、湿疹で赤く擦り切れながら米を研ぎ衣服を洗ってきた、何億という掌へのオマージュである。

註

- ¹¹⁾ 『『仮名読新聞』投書欄の詩歌と作者たち』『一橋論叢』、105 巻 2 号、1991、p.255
- ²⁾ マーシャル・マクルーハン『メディア論—人間の拡張の諸相』栗原裕・川本仲聖共訳（みすず書房、1987）p.46
- ³⁾ 伊藤一彦『現代“うたことば”入門』（NHK 出版、2006）p.2
- ⁴⁾ 俵万智『短歌をよむ』（岩波新書、1993）pp.128-31
- ⁵⁾ 山本武利『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版局、1981）p.349
- ⁶⁾ 『朝日新聞』1969 年 7 月 22 日朝刊 p.10
- ⁷⁾ 『朝日新聞』1955 年 12 月 14 日朝刊 p.5
- ⁸⁾ 『朝日新聞』1955 年 10 月 30 日朝刊 p.5
- ⁹⁾ 『朝日新聞』1955 年 10 月 2 日朝刊 p.5
- ¹⁰⁾ かつて殺虫剤として広く用いられていた有機塩素化合物「benzene hexachloride」を指す。
- ¹¹⁾ アイザリア・バーリン & ラミン・ジャハンベグロー『ある思想史家の回想』河井秀和訳（みすず書房、1993）p.118